

進学校における積極的な生徒指導の実践

－「育てたい生徒像」を基本とした学校行事への取り組み－

学籍番号 159969

氏名 松本英樹

大学院主指導教員 恩知忠司

1. 研究の目的と枠組

所属校（大阪教育大学附属高等学校平野校舎）の特徴の一つは、「生徒が自ら企画・運営する学校行事」であり、学校行事を通して生徒に「自主自立」の精神を育むことが創立以来、教育方針として引き継がれてきた。所属校はいわゆる進学校で、課題解決的な生徒指導をあまり必要としない学校である。が、生徒の成長を促す「積極的」な生徒指導は十全に行われるべきであり、学校行事はそのための大切な指導機会であると考えている。

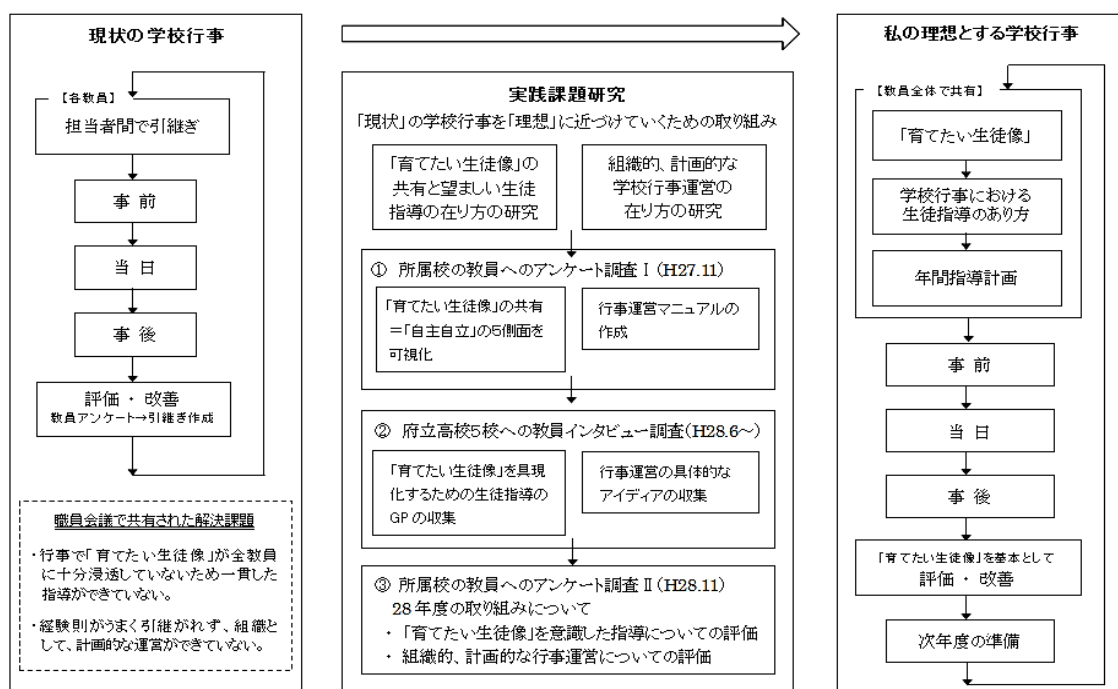
しかし、近年、生徒が主体的に活動して行事を創り上げているとは必ずしも思えない場面が出てきた。この現状を教員全体で議論したところ、「育てたい生徒像」が十分に浸透していないために教員間で一貫した指導ができていないこと、経験則がうまく引き継がれず組織として計画的な運営ができていないこと、が解決課題として浮かび上がってきた。

そこで、本実践課題研究では、「現状」の学校行事の課題を解決しつつ「理想」とする学校行事の仕組みに近づけるための具体的実践として、

(1) 「育てたい生徒像」の共有と所属校における望ましい生徒指導の在り方の研究

(2) 「行事運営マニュアル」等を活用した組織的、計画的な学校行事運営の在り方の研究

の双方に取り組むことにした。以下に、本実践課題研究の枠組を示す。



2. 理想とする学校行事への展開

理想とする学校行事への展開について、筆者には二つのミッションがあった。それは、①課題解決の取り組みを所属校の先生方と一緒に実際に進めること、②教職大学院生として学校行事における望ましい生徒指導の在り方を探究し所属校の課題解決に資すること、である。

①については、文化祭や体育祭といった学校行事を実際に「回し」ながら、具体的な場面に即して、先生方と意見を交換し問題意識を共有できるように努めた。焦らず弛まず、タイミングやスピード感を考えながら進めることを心掛けた。

②については、具体的なアクションとして、下表に示す調査を実施した。

調査名	目的	主な調査内容
アンケート調査Ⅰ *所属校教員対象 *H27.11実施	◆「育てたい生徒像」の具体化と共有 ◆「行事運営マニュアル」の作成	●「自主自立」を具体的にどのように読み解くか。 ●「自主自立」を実現するための具体の指導について ●「運営マニュアル」に盛り込むべき内容と担当業務の引継ぎ方法について
アンケート調査Ⅱ *所属校教員対象 *H28.11実施	◆平成28年度の学校行事運営についての教員による自己評価	●「育てたい生徒像」を意識した指導ができたか。 ●「行事運営マニュアル」を活用した計画的な指導や行事運営ができたか。
インタビュー調査 *府立高校5校対象 *H28.6~実施	◆生徒の成長を促す生徒指導の取り組み事例の収集	●生徒の主体的な活動を引き出す特色ある取り組み ●行事運営をスムーズかつ効果的にするアイデアや工夫について

先生方に改善意識や参画意識を高めてもらえるように、アンケート調査やインタビュー調査から得られた回答や実践事例を折に触れて提示した。

3. 研究の成果と課題

本実践課題研究の成果は次の5点である。

- ①所属校の教員の「育てたい生徒像」、すなわち、学校行事で身につけさせたい「自主自立」の力を「協調性・公共性」「主体性」「自律性」「責任感」「チャレンジ精神」の5つの側面で具体化し、教員全体で共有することができた。
- ②「自主自立」の5つの力を身につけさせるための指導法について、教員へのアンケート調査や府立高校でのインタビュー調査によって、具体的なアイデアや示唆を得ることができた。
- ③本年度の学校行事において、「育てたい生徒像」を意識した積極的な指導や、「行事運営マニュアル」を活用した組織的、計画的な行事運営が「できた」という肯定的評価が多くあった。
- ④教員へのアンケート調査により現状の学校行事の引継ぎ方法やマニュアルに盛り込むべき内容を分析精査し、体育祭や文化祭の「行事運営マニュアル」を作成することができた。
- ⑤「自主自立」の5つの力を身につけさせることを強く意識した指導や取り組み（仕掛け）を盛り込んだ「年間指導計画（案）」を作成することができた。

この2年間の実践課題研究においては、理想とする学校行事への歩みを着実に進めることができた。何よりも成長を促す指導（積極的な生徒指導）に対する先生方の意識が高まってきたことを実感している。また、「行事運営マニュアル」や「年間指導計画（案）」は学校行事の道しるべとしてこれからも引き継がれていこう。今後も「育てたい生徒像」を基本とした学校行事のサイクルがしっかりと組織に根付くよう取り組みを重ねていく。